

マルティアヌス・カペラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』

水落 健治

中世の自由学芸において、特に9世紀以降きわめて頻繁に引用・註解されたマルティアヌス・カペラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』の内容は、これまで日本ではほとんど紹介されて来なかった。本稿では、以下その概要をごく簡単に要約して紹介することにする。

1. 著者と著作

マルティアヌス・カペラ Martianus Capella は、紀元4世紀後半に活躍した作家である。その生涯については知られていないが、カッシオドルス Cassiodorus (c. 485-585) によれば、北アフリカマダウラの出身でカルタゴで教育を受けたという。彼の職業はおそらく弁護士であった(著作の2箇所から)。また彼は異教徒であり、同時期に同地域で活躍したアウグスティヌスとの面識はなかったと考えられている。

彼の著書『フィロロギアとメルクリウスの結婚』*De nuptiis Philologiae et Mercurii* (c.A.D. 410-429 執筆) は9巻からなり、最初の2巻で擬人化されたフィロロギアとメルクリウスの婚約と結婚が描かれ、残りの7巻で文法学 grammatica, 問答法(論理学) dialectica, 修辞学 rhetorica, 幾何学 geometria, 算術 arithmetica, 天文学 astronomia, 音楽 harmonia のそれぞれがフィロロギアの召使として現れて自らを説明するという形態をとっている。

以下、第3巻以降の内容を、同時期に同地域で活躍したアウグスティヌスの自由学芸理論を念頭に置きながら概観する。(以下、括弧内の数字は章番号)

2. Grammatica (第3巻)

まず、擬人化された grammatica が自らの仕事を次のように説明する。

私のかつての仕事は正しく読み書くことであったが、現在では学問的に理解し論証することが付け加わっている。これら2つは、私が哲学者たち及び批評家たちと共有するものとなった。私の部分は4つであり、音素 *littera*、文学（文献学）*litteratura*、文字の人 *litteratus*、文体 *litterate* である。（230f.）

そして次のような論述が展開される。

1. 音素 *littera*——母音、子音、文字の発音（232-261）
2. 音節 *syllaba*——音節の結合、アクセント、音節の長短、語末の音節（名詞とその格、代名詞、動詞、副詞、分詞、接続詞、前置詞、間投詞）（264-288）
3. 語とその形成——語源と派生（290-324）

grammatica の記述はここで終わり、*litteratura*、*litteratus*、*litterate* についての記述は行われていない。アウグスティヌスは、『秩序』*De ordine*.2.12.35 で *litteratio* と *litteratura* の区分について論じているが、アウグスティヌスの記述は本著作における「正しく読み書くこと」と *litteratura* との区分と軌を一にすると考えられる。

3. *Dialectica*（第4巻）

まず、以下の論述の典拠がウァロ Varro であることが示され、*dialectica* という名称についての説明が行われ、その4つの区分が示される。

1. 言葉について *de loquendo*（339-340）
2. 文について *de eloquendo*（341）
3. 推論について *de proloquiorum summa*（342）
4. 判断について *de iudicando*（343）

その後の論述は4部に分けられている。

1. プラトンの部分——5つの声、定義、全体と部分、同名異義・同名同義・異名同義（344-387）
2. 文法学的部分——文の名詞的部分と動詞的部分、命題の真偽、命題の形式（388-395）
3. アリストテレスの定言命題的部分——四種の定言命題（全称肯定 etc.）、類、差異、偶有性、定義、固有性、否定表現とその変換、

四種の定言命題の相互関係 (396-403)

4. アリストテレスの推論的部分——前提と結論, 推論, 関連推論, 定言三段論法, 条件三段論法 (404-422)

この記述について興味深いことは, ペリパトス派で発展した定言三段論法と, ストア派で展開された条件三段論法(クリュシッポス Chrysippos の「論証されない議論」)の双方が統合的に論じられているということである。また, dialectica の4つの区分を示す de loquendo などの用語がアウグスティヌス『問答法について』*De dialectica* のそれと酷似していることも重要である。

4. Rhetorica (第5巻)

擬人化された rhetorica の自己紹介は次のように行われる。

私の職務は説得するために相応しい仕方でも語ることであり, 目的は提示されたことを言葉によって表現することである。(439) ……私の職務の部分が5つであることは疑いない, 発見 inuentio, 提示 dispositio, 言語化 elocutio, 記憶 memoria, 発声 pronuntiatio である。(442)

以下, 個々の部分について詳述される。

1. 主題の発見——キケロ Cicero 『発想論』*De inuentione* を典拠に, 問題となっていることがらをいかに正確に言語化して捉えるかが詳細に論じられる。まず問題 quaestio の種類が「あるか」an sit, 「何か」quid sit, 「どのようなものか」quale sit の3種類に区分され, ついで, 弁論の種類が説得する対象に応じて次のように区分される。(443-458)
 - (a) 法廷弁論——判事 iudex を対象
 - (b) 協議弁論——審議者 deliberator を対象
 - (c) 祝賀弁論——評価者 aestimator を対象

そのうち, これらの弁論について, 様々な事例が掲げられ詳細に論じられる。(459-505)

2. 主題の提示(組立)——主題の提示の仕方が次の区分に従って論

じられる。序言 principium, 記述 narratio, 区分 partitio, 提言 propositio, 議論 argumentatio, 結論 conclusio (506-507)

3. 言語化——言葉の意味 (比喩, 派生語), 一貫したスタイル, 音韻上の配慮, 多義語を避ける, 言語表現の型, といった主題に即して論じられる。(509-537)
4. 記憶——記憶の方法, 記憶術 (538-539)
5. 発声 (実演) ——声, 表情, 身振り, 才能と訓練 (540-543)

これらの記述は, キケロ Cicero やクインティリアヌス Quintilianus の伝統に従っていると考えられる。

5. Geometria (第6巻)

まず geometria という名称について次のような自己紹介が行われる。

私が「大地を測るもの」 geometria と呼ばれているのは, しばしば大地を旅し, 測り, その形と大きさ, 位置, 部分の大きさを正当な根拠をもって示すことができるからです。(588)

ついで, この学科の主題が「地理学」と「幾何学」とであることが示され, それぞれの部分についての記述が行われる。

1. 地理学的部分
 - (a) 地球は球体である, その大きさ, その位置 (宇宙の中心) (590-600)
 - (b) 大地の区分とその地理学的記述——ヨーロッパ, アフリカ, アジア (601-702)
 - (c) 大地の大きさ (703)
2. 幾何学的部分——「点」と「一」, 平面幾何, 立体幾何 (704-722)

これらの記述で特に目を引くのは, geometria の記述のほとんどが膨大な地理学的・博物誌的記述によって占められているということである。幾何学的部分では, ユークリッド Euclides 『原論』 *Elementa* の冒頭が紹介程度に述べられるにしか過ぎない。

6. Arithmetica (第7巻)

まず、「世界における数の内在」というピュタゴラス的数理解が次の語によって述べられる。

私 (=数) は天に知られており、私が産み出した宇宙の事物も私を知っています。……あなたがた宇宙のすべては私から生まれたと考えます。(730)

その後の記述は三部に分けられる。

1. 「一」から「十」の思弁的考察——「一は聖なる数である」, 「三は最初の奇数であり、完全数である」, 「四は四元素からなる宇宙そのものである」等。(731-742)
2. ニコマコスの数学——数の定義, 偶数, 素数, 平方数, 素数, 約数など(743-767)
3. ユークリッドの数学——『原論』第7~9巻を典拠に, 偶数と奇数, 素数, 素数と約数との関係, 最大公約数・最小公倍数, 数列の相互関係などが述べられる。(768-802)

この要約から分かるように, arithmetica の部分では, 実務的計算の実習についての議論は全く行われていない。記述のほとんどは「ピュタゴラス的な数の思弁」である。

7. Astronomia (第8巻)

まず序論として, 天文学の起源としての魔術の問題と天文学に対する中傷の問題が述べられ, 4部にわたる議論が展開される。

1. 天球上の10個の軌道・軌道点——天頂, 夏至点, 春分・秋分点, 冬至点, 天底, 天の赤道, 黄道, 獣帯記号, 銀河, 地平線・水平線(817-826)
2. 天球の空間的位置関係(827-837)
3. 星座とその昇り沈み——黄道12星座, 蟹座, 天秤座, やぎ座など(838-848)
4. 惑星について——名称, 回転時間, 惑星の運行を説明する宇宙モ

デルなど (849-886)

これらの記述は天動説の枠組みで行われている。だがその記述の中で「水星と金星は太陽の周りを回っている」という「修正天動説」の主張が行われる (857)。後にコペルニクスはこの主張を賞賛している。またこの記述は、アウグスティヌス Augustinus が『神の国』*De ciuitate Dei* 16.9 で、「地球の平面性」を主張し、それが中世の時代に広く受け入れられて行ったこととの鋭い対比をなしている。

8. Harmonia (第9巻)

最後の第9巻では、長い序論ののち、まず文化を導くものとしての音楽について概説的な議論が展開される。

harmonia が人間にもたらした利点、ハルモニア理論の導き手 (テオフラストス、ピュタゴラス、アリストクセノス)、様々な楽器の発明、生活の中での音楽の役割 (祭儀、戦争、スポーツ)、安らぎをもたらす効果、呪術的效果、自然の音楽 (921-929)

そののち、旋律論とリズム論の記述が次の枠組みで論じられる。

1. 旋律論

- (a) 音——全音・半音・四分の一音、音の定義、3つの音程、旋法 (931-935)
- (b) 音楽の扱い方——素材的に、演奏として、提示として (936)
声——持続的な声と切断された声 (937)
- (c) 和声の7つの主題——音、音の隔たり、構成、種類、音程、旋律の作成 (938-966)

2. リズム論

- (a) リズムの定義 (967-969)
- (b) リズムを考察する視点——単位時間、脚、脚の種類、リズムの進行、(長音と短音の)置換 (970-980)
- (c) リズムの種類——daktylos, iambos, paeonium (981-990)

アウグスティヌスがカシキアムで書き始めた『音楽論』*De musica* がリズム論であったこと、彼がこれを執筆したのち、さらに旋律論を書こ

うと考えていたこと (*epist.* 101) は, ここに述べられる harmonia 論の二区分を前提している。